

絶対主義論に関する若干の疑点：稲子氏「ソヴェトの絶対主義論」を読む

柴田，高好

<https://doi.org/10.15017/1272>

出版情報：法政研究. 19 (3), pp.109-142, 1952-01-31. 九州大学法政学会
バージョン：
権利関係：



絶対主義論に關する若干の疑點

—— 稻子氏「ソヴェトの絶対主義論」を読む ——

柴田高好

目次

序

問題点

一、絶対主義の階級の本質

二、絶対主義の主要な任務

(一) 絶対主義と前期的ブルジョアジ

(1) 絶対主義とブルジョアジ

(2) 前期的ブルジョアジの歴史的 성격

(二) 絶対主義の主要な機能

三、均衡論

むすび

論説

序

私は前から、わが国の絶対主義研究について大きな欠陥を認めていた。誤解を恐れずに云へば、その研究のほとんどすべてが絶対主義の下部構造Ⅱ社会経済史的分析に集中され、その上部構造Ⅱ階級権力関係についてはマルクス・エングルスの古典文献の解釋あるいはその概念の論争が主として行はれてきた點が、すなわちそれである。その為⁽¹⁾に絶対主義そのものの概念が今尙明確にされていないことは、他の人々たとえば石母田、遠山氏らも指摘されるところである。これが焦點である。この最も肝心なポイントをばづしては、絶対主義の本質を、科學的に明らかにすることは出来ないのである。吾々はこのことを忘れていたのではないか。

一般に國家の問題は、科學的に如何にアプローチさるべきか？ 周知のようにレーニンは、この問題に關して次のように述べている——

『この問題をできるだけ科學的に考察するためには、國家は如何にして發生し、如何にして發展したかに、少くとも歴史的一瞥を投じなければならぬ。社會科學の問題を正しく考察し、多くの枝葉の問題や、驚くべきほど多種多様な反對意見のなかにあつて、自己を失はないだけの技術を実際に獲得するために必要にしてかつもつとも確實なことは、——この問題を科學的立場から研究するために最も重要なことは——根本的な歴史的關係を忘れないことであり、あらゆる問題をば或る現象は如何にして歴史上發生したか、その現象はその發展において如何なる主要段階を經過してきたか、といふ見地から觀察し、更にこの發展の見地から、そのものが現在どうなっているかを觀

察する事である。』(レーニン『国家について』、堀江邑一譯 六一七頁)。

すなわちここでレーニンは、あらゆる社會科學上の問題と同様に國家の問題も、國家の發生、發展、消滅の歴史的關係云ひかへればその辯証法的な發展過程の中にとらえられて、始めてその本質を明らかにすることができることを指摘しているのである。

このレーニンの言葉は、國家一般のみならず、また歴史上のあらゆる國家にあてはまる。とくに絶対主義國家は、封建社會より資本主義社會への過渡期に位する。したがつて他の過渡期的國家におけると同様にその階級關係はきはめて複雑である。この複雑な階級關係のなかにあつて、その本質を見失はないがためには、それが發生し、發展し、そして更に消滅して行つた具体的歴史的過程の研究、すなわちその政治史的研究が不可欠である。

偶々、稻子恒夫氏は名古屋大學「法政論集」第一卷第一号に、資料として「ソヴェトの絶対主義論——ソヴェト大百科辞典第二版の見解——」を公にされた。

私はソヴェトの絶対主義研究についてはほとんど知るところがないのであるが、稻子氏のこの論文を一読するものは誰でも、それがきはめて政治史的方法の上に立つていることに氣づくであらう。この點に關しては、稻子氏も次のように述べられている——

『このソヴェト大百科辞典の△絶対主義▽や、またソヴェトのこの種の研究に目を通すものは誰でもが氣がつくのだが、ソヴェトの絶対主義論が一般に△經濟史▽的な色彩が極めて少くて、絶対主義そのものをあくまで政治史の問題として、すなわち一つの統治の形態として取扱つているのである。これに引きかえて、日本ではどうゆう譯か絶対主義を論じている人はほとんどすべて經濟史學者であり、そのため日本の絶対主義論のほとんどのページは

經濟史的な敘述に埋つてゐるのが現状である。もちろん絶対主義を論ずる際に、その基礎構造である經濟をば綿密詳細に分析することは必要であるが、問題はこの經濟史的な分析だけで、そこから一挙に絶対主義そのものの本質を規定する點にある。』（「法政論集」一〇〇頁）。

『この意味で、ソヴェト歴史學確立以來約十年の研究の結果のもつとも圧縮された要約である、ここに紹介する』
 『絶対主義』は、日本の最近の絶対主義研究に特徴的な經濟主義的傾向と、まづたく對照的であるといえよう。』（同上、一〇一頁）。

これによつても分るとほり、私は、ソヴェトの絶対主義論が方法的に正しい方向を示しているのに敬意を表するとともに、また吾が國の絶対主義研究に關する稻子氏の意見に全面的に賛成するものである。

しかし、氏の所謂「ソヴェトの絶対主義論」は、私にとつて若干納得のいかないところをもつてゐる。それらの點をまとめてみたのが本稿である。

因みに、私はロシア絶対主義について特に研究しているものではない。が、この點については稻子氏も云はれてゐるとほり、『ロシアにおける絶対主義は西欧諸國のそれと若干違つた特有の姿をもつていたが、大百科辞典の『絶対主義』そのものが絶対主義一般を對象としてゐることは、ゆうまでもない。』（「法政論集」一〇二頁）のであるから、本稿において私はこれを絶対主義一般の立場から自由に取扱ふことにする。

(一) たとえば、石母田正「封建國家の本質とその歴史的諸形態」(岩波、歴史學研究会編『國家權力の諸階段』所收、同八〇頁)、遠山茂樹『明治維新』(岩波全書)二四頁、参照。

(二) 因みに附加する。從來のわが國における絶対主義研究のすべてが、政治史的研究を欠いていたといふのではない。『日本資

本主義發達史講座』第一卷における羽仁五郎「幕末に於ける社会經濟狀態、階級關係及び階級斗争」は、明らかに明治維新成立の政治史的研究であつた。がその後この氏の立場を更に發展せしめる試みはほとんどなされなかつた。研究および論争の焦點は經濟的發展段階の規定、とくにマニファクチュア論におかれた。それが、敗戦後ようやく客觀狀勢の好転と相俟つて、從來の研究が停滯的泥沼におち入つていた点が反省されると共に、あらためて政治史的研究の重要性が指摘されるに至り、前述せる遠山氏の『明治維新』、あるいは井上清氏の『日本現代史1明治維新』などの著作があらははじめたのである。日本の明治維新については上述の如きであるが、他方、ヨーロッパのアブソリュティズムについては、私は未だ寡聞にしてその政治史的研究のあるのを知らない。堀江英一教授は、力作『西洋經濟史』において「これまで通史としては珍らしい計畫—イギリス近代政治經濟史をなしとげようとした。」とされる(同書、序—一二頁)のであるが、それは教授のいはれる「政治經濟史」であつて、私のいふ政治史ではない。

問 題 点

稻子氏はソヴェト絶對主義論の特色を次の五點に要約されている。

- (一) 絶對主義は封建國家の最高にして最後の段階である。
- (二) 絶對主義の階級の本質は貴族・地主階級の独裁である。
- (三) 絶對主義の主要な機能は農民的・平民的反对派の抑圧である。
- (四) いわゆる貴族とブルジョアジーの△力の均衡▽の否定。
- (五) 絶對主義はブルジョアジーを政治的經濟的に利用し、逆にブルジョアジーは政治的な臆病と、農民的・平民

的反対派に対する恐怖から、絶対君主へと接近した。(「法政論集」一〇〇頁、傍點は原文のまま)。

この要約は極めて簡にして要を得たものであつて、私は本稿に於てもこれにしたがつて論をすすめるのが適當である。私の問題とする點もここにあるからである。就中本稿に於て私が特に問題としようとするものは、絶対主義の主要な任務に關する(二)と(五)である。しかし、この五つの論點は夫々相互に密接な關係にあつて任意に切りはなし得ないものであり、又絶対主義の階級の本質に關する(一)と(二)及び均衡に關する(四)を考察の外においては絶対主義の主要な任務自体も明らかにならないと考えられるので、(三)、(五)以外の論點にもふれることにしたい。順をおつて先づ絶対主義の階級の本質から考察しよう。

一 絶対主義の階級の本質

稻子氏の紹介論文は絶対主義の階級の本質について次のように述べている——

「絶対主義は身分的君主制にかわつてあらはれ、最大限の政治的な集中を特徴とする封建國家の最高にして最後の段階である。」(「法政論集」一〇三頁)

「その階級的な本質からゆうと絶対主義は貴族階級の、地主土地所有者階級の獨裁である。この獨裁を實現するために、支配階級に直接属さずに、かれらに対して相對的な独立性をもつてゐるが、かれらのもつとも一般的なまたもつとも根本的な利益をようとする強力な國家機構がもうけられる。レーニンの言葉によるとツァーリの君主制の階級的な性格は、ニコライ二世からどんな村巡査にまでいたるツァーリの権力と△官僚▽の巨大な非依存性と独立性を少しも取りのぞくものではない。この誤り——專制政治と君主制とを忘れ、これを直接に上流階級の

△純粹▽な支配に歸せしめること——を召還主義者が犯した▽（レーニン、全集、第四版、第十七卷、三二三ページ）。このレーニンの言葉はどの國の絶対主義にも当てはめることが出来る。』（同上）

私は之を次のように解する。

絶対主義の階級の本質は、右の文章が述べているように貴族・地主階級の独裁である。これに関連してマルクスは次のごとく云つてゐる——

『絶対君主は、ブルジョアジーのすべての卑屈な恭順さにもかかわらず、自己の眞の利害がこれら諸身分（封建的諸身分—筆者）のがわにあるとみとめてゐることはあきらかである。』（マルクス「道徳的批判と批判的道徳」、邦譯、マル・エン選集、第二卷上、八一頁）。

がしかし、その國家權力（機關）—軍隊・警察・官僚は支配階級たる貴族・地主階級より相對的に獨立してゐるのであつて、『古い絶対王制に（中略）おいては、現實の政治力は、特殊な軍人官僚閥に屬するのである。』（エンゲルス、「住宅問題」、大内兵衛譯、九五頁）。

これに対して同じ封建國家であつても絶対主義國家の前の封建國家—分權的封建國家にあつては事情は異なる。勿論この國家形態においても、その階級の本質が貴族・領主階級の獨裁であつたことはゆうまでもない⁽¹⁾。しかしそこにおいてはその國家權力（その集中的表現たる領主裁判權（grundherrliche Gerichtsbarkeit）⁽¹¹⁾）もまた、直接に、支配階級たる領主—土地所有者の手にあつたのである。この分權的封建國家にあつては王權といへどもいまだ領主社會の中の一分子、せいぜい有力な一分子であるにすぎなかつた。この意味で分權的封建國家は上流階級の純粹な支配体制であつたと云ひうる⁽¹²⁾。

つまり、分権的封建國家にあつては國家は實質的にも形式的にも貴族・地主階級の独裁であつたに對して、中央集権的封建國家たる絶対主義國家にあつては國家は實質的にはやはり貴族・地主階級の独裁機關であつたが形式的には支配階級より相對的に獨立しているのである。

しかし絶対主義國家權力のこのような獨立性はあくまで形式的相對的であつて單に外觀上のものにすぎない。この點についてエンゲルスは次のように云つている――

『社会の外にあつていわばその上に立つが如く見えているこの閥族（前述の特殊な軍人官僚閥―筆者）の獨立性こそ、社会と獨立のものだといふ外觀を、國家に与えているのである。』（エンゲルス「住宅問題」、前掲同頁、傍點筆者）

また、『例外的には、相斗争する諸階級が互に殆んど均衡を保つて、國家權力が外觀上の調停者として一時兩者に對して或る程度の獨立性を得るが如き時期が現はれる。貴族と市民階級とを互に平衡させた十七、八世紀の絶対主義がそれである。』（エンゲルス「家族・私有財産及び國家の起原」西譯、岩波版、二二七頁、傍點筆者）

すなわち、これによつても明らかごとく絶対主義國家權力の獨立性は「外觀」だけであり、それは「外觀上の調停者として」〔als scheinbare Vermittlerin〕^(四)作用するにとどまるのである。稻子氏の紹介論文も上述の「家族・私有財産及び國家の起原」の言葉を引用したあとで次のように述べている――

『ここから明らかなのは、單に絶対主義國家が二階級の、すなわち貴族的・ブルジョア的な國家ではなかつたことだけではなく、その△調停者▽としての役割が外見的なものにすぎなかつたことである。』（「法政論集」二〇四

頁）

しからは、絶対主義國家權力のこのような「相對的獨立性」、^(五)「閥族の獨立性」、或はその「外觀上の調停者」と

しての地位はどこから生じたのか？ それは『相斗争する諸階級が互に殆んど均衡を保つて』（エンゲルス「家族・私有財産及び國家の起原」前掲）、『王權が一方の階級によつて他方の階級を威嚇するため、ブルジョアジーを貴族との對抗に利用した』（エンゲルス「反デューリング」林要譯、三四頁）ためである。ここで問題となるのは「均衡 Gleichgewicht」の意味である。半分貴族的な、半分ブルジョア的な國家といふ見解はいま問題としない。均衡といふのは絶対主義の固有の物質的基礎について云はれるものではなく、絶対主義國家權力の相対的独立性を着装せしめる要因であるにすぎないことはすでに平野氏の指摘される通りである。^(五) 稻子氏の紹介論文も先に絶対主義國家が二階級の、すなわち貴族的・ブルジョア的な國家ではなかつたことを指摘していた。したがつてそこではカウツキー流の階級均衡論は、明白に否定されている。しかし、「力の均衡」そのものは否定されていないと私は思ふ。この點、氏が「いわゆる貴族とブルジョアジーの力の均衡」の否定」といはれる（要約の（四））のは私には納得できない。

ところで、カウツキー流の階級均衡論を否定する吾が國の論者もこの「力の均衡」そのものについてはあまり考察をすすめていないように思はれるのであるが、氏の紹介論文はこれを次のように説明する――

『エンゲルスは力の均衡について述べているが、それはもしブルジョアジーが人民大衆の反封建運動の先頭に立つたならば、かれらは政治的に支配している領主の階級に劣らない力を代表しただらうとゆう意味である。』

（「法政論集」一〇四頁）。

これはたしかに吾々にとつて耳あたらしい規定である。しかしここにおける、ブルジョアジーの把握には疑問がある。吾々は次の第二項「絶対主義の主要な任務」においてブルジョアジーについての考察を終えたのち、あらためて第三項でこの問題にふれることにしたい。

本項において検討さるべき問題はまだ残されている。例えば、氏の紹介論文が、『絶対主義は身分的君主制にかわつてあらはれ、最大の政治的な集中を特徴とする封建国家の最高にして最後の段階である。』（前掲）と云ふとき、その「身分的君主制」と私のいふ「分権的封建国家」との關係、あるいはまた絶対主義が封建國家の最高、段階であるといふその最高の意味などがそれである。が、はじめに述べたように本稿における私の中心點は次の第二項にある故、この問題についてはここで検討しないことにする。

- (一) レーニン『國家について』堀江一邑譯 一九二二頁
- (二) 領主裁判權の意義については、高橋幸八郎『近代社會成立史論』第二篇「所謂農奴解放に就いて」の註⁽²⁹⁾を参照されたい。
- (三) したがつて、分権的封建國家はまた純粹封建國家と云ひうるのではないか。
- (四) F. Engels, *Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats*. Aufl. X III, Stuttgart, 1910, S. 180.
- (五) 平野義太郎『ブルジョア民主主義革命史』五九頁。

二 絶対主義の主要な任務

絶対主義の主要な任務について稻子氏の紹介論文は次のように述べている——

『自分の主要な任務——反封建勢力の抑圧——を絶対主義は二重の方法で行つた。一方では絶対主義は大衆的な人民運動をざんこくに抑壓して、あらゆる方法でそれを防止したのである。その主要な機能は人民大衆の農民的・平民的反対派の鎮圧であつた。イ・ヴェ・スターリンの言葉によると△搾取されている大多数を拘束する▽ことは、奴隸制度、封建制度、資本主義におけるどんな形態の國家でももっている主要な機能であつた。（スターリン、

レーニン主義の諸問題、第一版、六〇四ページ。他の一方では絶対主義は、當時客觀的には反封建革命の先頭に立つことができたただ一つの力であるブルジョアジーを、反封建陣營から切りはなして、自己の陣營に引き入れる政策を行つた。』（「法政論集」一〇三—一〇四頁）

これによれば先づ絶対主義の主要な任務は反封建勢力の抑圧である。これは正しい。絶対主義國家の階級の本質が貴族・地主階級の独裁であるからにはこれは當然である。だが次の絶対主義の機能に関してその云ふところはこうである。絶対主義の主要任務は反封建勢力の抑圧であるが、その反封建勢力は二つに大別される。それは人民大衆の農民的・平民的反封建勢力とブルジョア的反封建勢力である。しかもこの中でブルジョア的反封建勢力のみが、客觀的に反封建革命の先頭に立ち得る唯一の勢力である。したがつて絶対主義の任務たる反封建勢力抑壓の機能も二つに分かれたる。一つのそして主要な機能は農民的・平民的反对派の反封建人民運動の抑壓・鎮壓であり、他の一つはブルジョア的的反封建勢力の革命陣營より自己陣營への切りはなしである。これは正しいであらうか？
ここで先づ問題となるのはブルジョアジーについてである。

(一) 絶対主義と前期的ブルジョアジー

(1) 絶対主義とブルジョアジー

論 說

絶対主義とブルジョアジーの關係について論點を明確にするために、もうすこし氏の紹介論文の云ふ所をきいてみよう。それは絶対主義の対ブルジョアジー政策について次のように述べている——

『絶対主義國家はブルジョアジーを經濟的に保護する自分の政策によつて、ブルジョアジーの經濟的な成長と強

化を促進し、これとともにかれらを人民大衆から切りはなしたのである。このことによつてそれはブルジョア階級を政治的に無力にし、反封建革命の到来の時期を多少とも引きのばすことに成功した。』（「法政論集」一〇四頁）つまりこれによれば、絶対主義の対ブルジョア階級政策はブルジョア階級を買収してこれを人民大衆から切りはなし、それによつてブルジョア階級を政治的に骨抜きにしてブルジョア民主主義革命の時期を多少とも（或は出来る限り）おくらせる事にあつたのである。

ではブルジョア階級の方はどうであつたか。ブルジョア階級は何故買収されたのか？ それはこうである。氏の紹介論文は云つている――

『ブルジョア階級の方からみると貴族的な絶対主義國家との接近は、いつでも政治的な懐病の、すなわち人民大衆の革命的な自然發生力に対する恐怖のあらわれであつた。』（「法政論集」一〇四頁）

そして更にこのようなブルジョア階級の懐病な態度を裏づけるために、次のマルクス・エンゲルスの言葉が引用される。すなわち――

『プロシヤにおける絶対主義の根強さをエンゲルスは、そこにはいまだに力が強くて大土地を所有する貴族階級とならんで、ひかく的若くて極めて懐病なブルジョア階級が存在している』ことから説明した。ブルジョアは、マルクスの言葉によると△革命の時に賤民たちが圖太くなつて、よけいに遠くまで行きすぎることを知つている。ブルジョアの紳士がたはだから出きるだけ絶対君主制をばブルジョア君主制へと、革命なしでおだやかな方法で作りかえようと努力する。』（「法政論集」一〇四頁）

だが、このようなブルジョア階級の把握には疑問がある。ここにはブルジョア階級についての理解の混乱があるの

ではないか？

先づ手がかりとしてここに引用されているエンゲルスの言葉をしらべてみよう。これは『住宅問題』のなかに出てくる言葉であつて、エンゲルスがこれを書いたのは一八七二年である。一八七二年といへばそのなかでエンゲルスも指摘しているとほり、一八四八年以降假面立憲主義の覆の下に次第に解体の運命をたどつていたドイツ絶対王制がボナパルティズム國家へ全面的に移行した時期である。この時ドイツでは未だブルジョアは支配していない、ドイツでは國家はある程度社會の上に浮いてゐる力である、だからそれは社會の全利害を代表するものであつて個々の階級を代表するものではない、と主張する反動論者に対して、いや今日では國家はますますブルジョア階級の手におちてゐる、とゆう反駁の中でエンゲルスが云つてゐるのがこの言葉なのである。^(一)したがつて、ここに云はれてゐるブルジョア階級とは、絶対主義解体當時のドイツ・ブルジョア階級である。つぎに、マルクスの言葉はどうであらうか。これはマルクスの論文『道德的批判と批判的道德』の中に出てくる言葉であつて、書かれたのが一八四八年の三月革命に先立つわづか四ヶ月前である。^(二)マルクスはここで一人のドイツ文化史家をとりあげて、その自由主義ブルジョア階級に対する無理解さをわらつてゐるのであるが、その邦譯を示せば次の通りである――

『ハインツェン氏は、勞働者を理解してゐないのとまつたく同様にブルジョア自由主義者たちをも理解してゐない。(中略) 愚直者の彼は、カンプハウゼンやハンゼマンのような男が卑屈な文句でデビキエーしたことを、大まじめにとつてゐる。ブルジョア諸氏は、この素朴さに微笑することだらう。彼らには、自分たちのいたい點がもつともよくわかつてゐる。彼らは下層民が革命では大胆となり、手をだすことを知つてゐる。したがつてブルジョア諸氏は、できるだけ革命なしに、穩便な方法で絶対王制をブルジョアの「王制」に轉化させようとするのである。』

(マル・エン選集、第二卷上、八〇—八一頁)

見らるる通り、マルクスがここで云つてゐるブルジョアジーは、ドイツ・ブルジョア革命期における自由主義ブルジョアジーである。エンゲルスもマルクスもドイツにおける絶対主義解体期、ブルジョア革命期の自由主義ブルジョアジーについて云つてゐるのである。このことは明瞭である。

ここで注意しなければならぬ！。吾々がいまブルジョアジーについて問題としてゐるのは、絶対主義の成立期乃至確立期においてであつて、未だその解体期・ブルジョア革命期においてではないのである。したがつて稻子氏の紹介論文が未だこの段階においてブルジョア革命期における自由主義ブルジョアジー(しかもドイツの)の態度を引用することは、何を意味するか？ 云ふまでもなくそれは、絶対主義によつて保護され土地貴族との均衡に利用されたブルジョアジーとブルジョア民主主義革命期において客觀的に指導的役割を演ずべき(演じたといふのではない)ブルジョアジーとを、範疇的に同一視してゐることを意味するのである。このことは、イギリス及びフランスにおけるブルジョア民主主義革命に関してその云ふところをみればあきらかである——

『資本主義的なウクライナが成熟してくるにつれて、絶対主義は不可避にブルジョアジーの保護者から、かれらのより一層の發展の途上に横わる障害となつた(十七世紀イギリスにおけるスチュアルト、十八世紀フランスにおけるルイ十六世と十七世)。ブルジョアジーの前には、まつたく皮肉なことだが反封建革命の必要の問題が、すなわち人民の革命的な力と同盟せざるを得ないとゆる問題が生じた。』(「法政論集」一〇五頁)

すなわちこれによれば、いまままで絶対主義の保護下にあつたブルジョアジーはその一層の發展と共に、いまやこれを桎梏と感じ、かつてみづから裏切つた人民大衆と同盟して之を打倒しようとするに至る、といふのである。

ところで、と吾々は反問しなければならぬ。一体、絶対主義によつて保護され土地貴族との均衡に利用されたブルジョアジーと絶対主義を打倒せんとしたブルジョアジー、ブルジョア民主主義革命において客觀的に指導的役割を演ずべきブルジョアジーとは、範疇的に同じであらうか？ またブルジョア民主主義革命においても、絶対主義と最後までその運命を共にしようとしたブルジョアジーとこれを革命すべき任務をもつたブルジョアジー（彼らがその任務を放棄したか否かといふことは全く別の問題である）とは區別されるのではないか？

この点について先づ、一八四八年のドイツ革命当時の、オーストリアの政治情勢に関するエンゲルスの分析に目をむけてみよう。エンゲルスは云つてゐる――

『メツテルニヒ公の政府は、（中略）このことこそつねに絶対君主國の根本原理であつたのだが、封建的地主と大株式資本家との二つの階級の支持にたよると同時に、この兩階級のあいだに勢力と権力の均衡をつくりだし、このようにして政府にじゆうぶんの行動の独立性を確保するということであつた。（中略）だからこの方面からは、反政府運動の影さえおこるはずがなかつた。以上のようにメツテルニヒは、帝國內でもつとも強大な、もつとも勢力のある二つの階級の支持をたのむことができたうえに、絶対主義のあらゆる目的からいつてこれ以上のものは、ぞめないほどにうまく組織された軍隊と官僚とをもつていた。（中略）

その他の人民の諸階級については、メツテルニヒは、「ふるき御世 (ancien régime)」の政治家の本領を發揮して、彼らの支持をえようなどと氣をつかうことはすこしもなかつた。彼らに対しては、彼はたつた一つの政策しかもつていなかつた。すなわち、この連中からはしぼりとれるだけ税金でしぼりとれ、それと同時に彼らに四の五の文句をいわすな、ということがそれであつた。オーストリアでは、商工市民階級（本來のブルジョアジー、前述せるド

イツの憶病なブルジョアジー、筆者註)の發達は遅々としていた。(中略)製造工業家についていえば、彼らはかなり手あつい保護をうけており、この保護はたいがいの場合にいつさいの外國の競争を排除するまでになつていた。しかし、彼らにこのような便益があたえられたのは、おもにその税金の負担力をます目的からであつて、この便益は、製造工業にくわえられていた國內的な諸制限や、ギルドその他の封建的團體にあたえられた特權などによつてかなりの程度に相殺された。政府は、これらの制限や特權を、それが政府の意圖やもくろみのさまたげにならないかぎり、入念に維持したのである。(中略)

しかしながら、そのあいだにも一つの緩慢な潜行的運動が進行して、メツテルニヒのいつさいの努力をくつがえしてしまつた。商工市民階級の富と勢力は増大した。』(エンゲルス、「革命と反革命」、邦譯、マル・エン選集、第四卷上、四一—四六頁)。

『ウィーンの革命は、ほとんど全住民が一致連合しておこなつたといつてさしつかえない。銀行家と株式仲買人をのぞいたブルジョアジー、小企業者の階級、勞働者——この全体が万人にきらわれた政府に反対して突然いつせいに蹶起したのだが、この政府は一般にはなはだしくにくまれていたので、従来この政府を支持していた少数の貴族と金融貴族たちは、攻撃の最初の火ぶたがきられると同時にどこかへ雲がくれしたほどであつた。』(同上、五一—五二頁)。

右において明らかなる通り、ここにおいては、大株式資本家、銀行家、株式仲買人、金融貴族としてのブルジョアジーと商工市民階級、製造工業家や貿易業者のブルジョアジーとは、明瞭に區別されている。前者は均衡に利用されたブルジョアジーであり、後者は絶対主義政府に対抗したブルジョアジーである。

同じことはフランスについても云へる。そこにおいては一口にブルジョアジー、第三身分といつても、びんからきりまであつた。その上層はごく少数の大商人や大企業家によつて占められ、彼らはその形式的な身分こそ低かつたが王室や土地貴族に対する債権者であつて、その称号をもつと否とにかかはらずいづれも金融貴族であつた。彼らのなには實際婚姻や財力によつて貴族に成り上つたものも少くなかつた。このような彼らの立場からは國王をはじめとする大貴族を倒すどころか、これを支持しこれに頼つて人民たちから出来るだけ搾取させる必要があつたのである。彼らは、所謂前期的資本家、商業高利貸資本家であり、政商であつた。また彼らはマニファクチュアを經營した。しかしそれは所謂特権マニファクチュアといはれるものであつて、下からの自生的な産業資本の發展に対抗する上からのなしくづしの産業資本の育成である。それは自生的な産業資本が封建制の土壤の排除の上に立つのに対して、むしろ封建的土壤を出来る限り濫存して直接生産者を封建的な搾取と資本主義的搾取の二重の搾取の下に呻吟させるものであつた。このような上層ブルジョアジーにとつては、債権者として國庫の具合がどうなつてゐるか、商人、企業家として商工業の自由を妨げる個々の古い制度がどうなつてゐるか、この二つの面において不安や不都合をなくしさへすればあとはどうでもよかつたのである。絶対主義を倒すなどとは思ひもよらない。このようないはば特権ブルジョアジーの下に、新興の意気に燃えた中等商工業者、下からの自生的な近代産業資本家（農村および都市のマニファクチュア主）があつた。彼らこそ本来の革命的ブルジョアジーである。旧制度によつて縛られこそすれ何の思恵にもあづからなかつた彼らにとつては、絶対主義は一刻も早く打倒すべきものであつた。更に彼らの下には第三身分の中にも入れられない老大な人民層、すなわち都市小ブルジョアジー、前期的プロレタリアート、および農民があつた。革命の推進力は彼らであつた。

論 說

イギリスについても同様である。一六四〇年にはじまるイギリス革命において、王党派には土地貴族、前期的資本家が、議会派には産業資本家、ブルジョア地主があつて、これらに対立した。しかし革命の初期において革命を指導したものは、チェントリイ、長老派議員 Presbyterians であつた。これらは現在のチャールズ一世の政策に反感をもつ大地主、都市の商業高利貸資本家、大金融業者、独占的植民地会社の重役連であつて、彼らはチャトルズの政策には反対したもののその反対には自ら限度があつた。彼らは革命の進行と共に次第に反革命の本質を暴露し、遂には王と結んで第二次内亂を起すに至る。そして一六四九年一月、独立派 Independents に代表される産業資本家と水平派 Levelers その他に代表される下層人民大衆との同盟による王の處刑と共に、一時その勢力を失墜するに至るのである。

以上述べたところから分るように、絶対主義によつて保護され土地貴族との均衡に利用されたブルジョアジーと絶対主義を打倒せんとしたブルジョアジー、ブルジョア民主主義革命において客觀的に指導的役割を演ずべきブルジョアジーとは範疇的に異なる。前者、前期的資本家＝商業・高利貸ブルジョアジーこそ吾々がいま問題としなければならぬブルジョアジーなのである。したがつて稻子氏の紹介論文が、これらを範疇的に同一視し、この前提の上に立つて論をすすめる以上、それらは誤つたものとならざるを得ない。ブルジョア民主主義革命期、絶対主義の解体期における絶対主義とブルジョアジーとの關係についてその論点が誤つてゐることは、すでにこれまで述べてきたところで明らかであらう。特にそれは、古典的ブルジョア民主主義革命（フランス、イギリス）における革命的ブルジョアジーと人民大衆との同盟を、「まづたく皮肉なこと」としてしか理解してゐない点（「法政論集」一〇五頁、本論文一二〇頁）に明瞭にあらはれてゐる。ブルジョア民主主義革命についてはまた後に少しふれようと思ふのであるが、吾

々は次に絶対主義の成立期乃至確立期における絶対主義とブルジョアジー（前期的）との関係——絶対主義の対ブルジョアジー政策、ブルジョアジーの絶対主義への接近——を、あらためて検討しなければならない。

(2) 前期的ブルジョアジーの歴史的 성격

絶対主義の成立期乃至確立期における絶対主義とブルジョアジー（前期的）との関係について、稻子氏の紹介論文が云っている点はすでに述べた。それについてここで問題とさるべきは次の三点である。すなわち、当時（絶対主義の成立期乃至確立期）ブルジョアジーは客觀的に反封建革命の先頭に立ち得る唯一の力であつたか？ 絶対主義のブルジョアジーに対する經濟的保護政策は主に人民大衆の革命力よりこれを切りはなすために行はれたものであつたか？ ブルジョアジーの絶対主義國家への接近はいつでも政治的な臆病の、すなわち人民大衆の革命的な自然發生力に対する恐怖のあらわれであつたか？ この三点について順をおつて検討しよう。

(1) 先づ、当時（絶対主義の成立期乃至確立期）ブルジョアジーは客觀的に反封建革命の先頭に立ち得る唯一の力であつたか？

そうではなかつた。前期的資本家は、客觀的にも主体的にも反封建革命の先頭に立ち得る勢力であるどころか、正にこの逆であつた。なるほど彼らは貨幣形態の富の所有者として、自然に現物形態の富（土地）の所有者たる封建領主に對立する。がしかし、この對立は二次的相對的のものであつて、決して根本的な對立關係ではない。何故なら、前期的資本は、従来の封建的生產様式に對して解體的に作用しはするが、それがどの程度まで旧生産方法を解体せしめるかは一に所与の封建的土地所有の性格（強弱）によるものであり、さらにまたその解体の結果がどうなるかも前期

論 說

的資本の与り知るところではないからである。つまり、前期的資本の發展は、封建社会における直接生産者たる農奴
 Ⅱ 農民および手工業者と主要な生産手段（土地）の所有者たる封建領主との間の基本的対立關係を緊張せしめるが、
 その緊張の結果がどうなるか、直接生産者の經濟が領主經濟を壓倒してゆくか（イギリス型）、それとも領主經濟が
 農民の經濟を壓倒してゆくか（プロシヤ型）はその關知するところではないのである。むしろ後には、前期的資本
 それ自体は旧來の生産事情を自己の存在の前提として維持し、資本制生産（産業資本）の發展を極力阻止せんとする
 傾向をとつたのである。^(四) 平野氏によれば、これは「十月党」^{オクチャプリスト}的資本である。氏は云つてゐる――

『「十月党」資本とは、封建社会の懷のなかで育ち、これと共に住み、できる限り、この封建社会の收取方法を
 利用した資本のことである。半封建的土壤を全面的にかつ極度に利用するかぎりには、すべての資本、むしろ、商業
 資本および高利貸資本のみならず、その直接の子孫たる資本もみな、この性質の資本である。そこに「農奴組織
 から成長したブルジョア社会」における農奴地主的資本は、封建的土壤を全面的にかつ極度に利用する点におい
 て、純粹な「民主的資本」と異なる。十七、八世紀のイギリス、フランス、十九世紀前半期までのドイツ資本は、こ
 の十月党的資本であつて、それへの依繋・それとの結合がこの絶対主義における官僚の本分であつた。』（平野義
 太郎『ブルジョア民主主義革命史』六六―六七頁）

これによつても明らかのように、一言にして云へば前期的資本存立の基礎は半封建的土地所有にあつたのである。
 かかる基盤の上に立つ前期的ブルジョアジーに、反封建革命の先頭に立ち得る客觀的能力がなかつたことは云ふまで
 もないであらう。

(四) 次に、絶対主義のブルジョアジーに対する經濟的保護政策は主に人民大衆の革命力よりこれを切りはなすため

に行はれたものであつたか？

これもそうではなかつた。絶対主義の対ブルジョアジー政策についてのこのような考へは、當時ブルジョアジーが客觀的に反封建革命の先頭に立ち得るといふ前提から出ているものであることは云ふまでもないが、それはすでに(イ)において否定された。

絶対主義化せんとする封建勢力乃至王権或は絶対君主が何故ブルジョアジーを保護したかと云へば、それは一にブルジョアジーの有つてゐる經濟的權力手段すなわちその貨幣力に頼つて、これを自己の權力の確立乃至強化に資せんとしたためである。つまり、その初期にあつては自己に対立する個々の封建領主を打倒し、また宗俗の封建領主に牛耳られその本質においては封建的な中世議會(五)に依存するをなくするために、後にはその財政的必要(財政的窮乏)のために、絶対主義は前期的資本家と結托するのである。大塚教授によれば、

『前期的資本は絶対王制の上層における經濟的基礎である。』(大塚久雄『近代資本主義の系譜』上、八七頁)

(ハ)最後に、ブルジョアジーの絶対主義國家への接近はいつでも政治的な臆病の、すなわち人民大衆の革命的な自然發生力に対する恐怖のあらはれであつたか？

なるほど彼らは、封建制度の崩壊期に激化する下からの農民的・平民的(六)反封建運動とくにその集中的表現とみられる農民戦争 *Bauernkrieg* において、農民と同盟せる都市の平民的(六)反対派 *Plébejische Opposition* に対する恐怖の前に始めから反革命の側に立つてゐた。ドイツ農民戦争における都市貴族、或はイギリス農民戦争「ワット・タイラの亂」における都市とくにロンドンの特権階級の動きはこれを示している。むしろ彼らは反革命の推進力でさえあつた。しかし、それは従來述べてきた彼らの性格からいへば当然のことであつて、革命勢力がその同盟者を裏切つて

反革命陣營へはしつたといふのではないのである。

事態はそれほど簡単ではない。むしろ分権的封建制度の崩壊、絶対主義の成立期における前期的資本家の政治的動向は、極めて微妙である。分権的封建制度の崩壊期にあらはれる政治的混乱——とくに農民戦争以後における——の眞只中であつて、彼らは決してみづから政治的イニシヤチーフはとらなかつた。政治の檜舞台に活躍したのはいづれも封建権力者であつた。農民戦争に集中表現される下からの農民的・平民的封建運動、これに対応する上における封建支配者内部の抗争の激化、大領主の封建保守派と中小領主・下級騎士階級の封建改良派の争、王権の前者への對抗と後者への支持、このような極めて複雑な対抗関係のなかにあつて前期的ブルジョアジー、都市貴族はほとんど目立つた政治的動きは行はない。^(七)しかも彼らはそのかげにあつて、強大化すると見込んだ封建的リーダーはぬけぬけなくこれを支持したのである。^(八)

そして、結局彼らは中央集権的統一権力を樹立した絶対君主と結託して行つた。それは、彼らの経済的欲求それ自体にもとづくものであつた。彼らはすでに以前から強大な封建権力者として王権との直接取引の傳統を有していた。^(九)王権は彼らによつて莫大な金をあつめることが出来たと共にまたその代償として様々の特權を彼らに与えたのである。彼らは王が金に不足している時にはいつでもこれと直接取引して金を融通し、その代りに彼らの欲するものを得ることが出来た。このような王との直接取引の傳統の上に立つ彼らはさらに、絶え間のない封建領主間の争 (baronial wars)、地方分権的な封建制度、前述したような封建制の分解期に伴ふ種々の政治的混乱はその利益に反するものであることを知り、國內秩序と取引の安全を約束し國の小単位への分裂を否定する強大な中央集権的絶対主を要望するに至つたのである。けだし、貨幣に飢えている絶対君主ほど彼らの容易に操縦し得るものはなかつたし、そして

またそれこそ彼らの國家的保護と獨占の政治的要求に合致したものであつたからである。(10)

簡単に云つてしまへば、分權的封建國家の崩壞の上に立つ中央集權的封建國家―絶対王制―これこそ彼らの經濟的したがつてまたその政治的欲求を十全に満足せしめる唯一の國家形態であつたのである。エンゲルスは云つている―

『一四世紀から一六世紀にいたる間に、商業資本はヨーロッパ住民の古き自然經濟を變革し、封建主義の政治制度を無用のものたらしめた、絶対主義の勝利は經濟的必然となつた。』(エンゲルス『ドイツ農民戰爭』大内力譯、岩波版、七九―八〇頁)

以上述べてきたところから、吾々は絶対主義の成立期乃至確立期における絶対主義とブルジョアジー(前期的)との關係について稻子氏の紹介論文が云ふところに賛成することは出來ない。

それでは次に絶対主義の主要な機能に關してはどうであらうか。

その前に、吾が國においても、当時のブルジョアジーはその表面的な封建制への寄生性にもかかわらず本質的には封建社會における同じ被支配者として農民および無産市民の味方であつた、しかしそのために封建権力者は富裕な市民と農民との提携をその権力をもつて破つて市民を自己の側にひきつけた、富裕な市民の方もこのような封建権力者の壓迫の前に農民や無産市民との同盟の決意がつかずにその市民衆としての立場を裏切つて封建的壓迫の側にはしつた、こうして結局彼らブルジョアジーは封建的特權に依存することとなつて自己の前途をも發展的でないものにしてしまつた、とする人もある。羽仁氏の立場がそれであるが、このような考へに賛成し得ないことはもはやこれまで述べてきたところから明らかであらう。

(二) 絶対主義の主要な機能

ことわるまでもなく、ここにいはゆる「主要な機能」とは次の意味である——

『二つの基本的な機能が國家の活動の特徴づけている。すなわち対内的（主要な）機能は、搾取されている多数者をおさえつけることであり、対外的（主要でない）機能は、他の國家の領土を犠牲として、自國の、すなわち支配階級の領土を擴張し、あるいは他の國家からの攻撃にたいして自分の國の領土をまもることである。』（スターリン『レーニン主義の諸問題』、第十一版、六〇四頁。邦譯、研究資料版、一二四五頁、傍點、筆者）。

稻子氏の紹介論文にもこの意味で用ひられていることは云ふまでもない。（「法政論集」一〇三頁。本論文一一六頁。）しかし、それが、この絶対主義國家の主要な機能を、農民的・平民的反対派の鎮圧であるとしているのは正しいであらうか？

私は、絶対主義の政治史的把握は人民の反封建運動との対抗面において、とくにその形成期にあつては農民戦争との、その解体期にあつてはブルジョア民主主義革命との、この二つの対抗面に焦点をあはせつつ行はれなければならぬと考える。稻子氏の紹介論文も基本的にはかかる方法の上に立つていたのであるが、すでにみたブルジョアジーを一律に把握していたように（或はそのために）、それはまた下からの反封建勢力をも一律にしか把握していない。すなわち、農民的・平民的反対派がそれである。しかし、反封建勢力の内容は、絶対主義の形成期と解体期においては明瞭に區別されるのであつて、資本主義の發展段階に即していへば、前者は文字通り資本主義の黎明期に、後者は資本のマニファクチュア段階以後にぞくする。^(二二)次にこれを稍々くわしく見よう。

絶対主義の形成期、分権的封建制度の崩壊期を色どる反封建革命運動、これこそ農奴農民と都市の平民的反対派の同盟による革命運動、その集中表現たる農民戦争である。農民・平民的反対派 *Bäuerlich-plebejische Opposition* といふ言葉は、厳密にこのような農民戦争 *Bauernkrieg* 當時の農奴農民を中心とし都市の平民的反対派を同盟者とする革命的党派について云はれるものである。^(一三) 彼らは、迫りくる封建的危機をそれによつて回避しようとする封建領主の再版農奴制への企圖、および多かれ少なかれそれと結びついた前期的大商人に反抗して、封建的土地所有の徹廢、領主(裁判)權、種々の獨占的特權の廢止をスローガンとして立つたのである。^(一四) それは下級僧侶、手工業者らの革命的小ブルジョアジーにひきいられた農民と都市平民の広汎な反封建人民運動であつた。これに対して反革命の陣營に立つたものは、宗俗の大封建領主、王、および都市貴族すなわち都市の特權的市民(商人・地主)であつた。下級騎士および都市の市民的反対派ははじめは動搖するが、後には反革命陣營に加はるに至る。そうして結局農民的・平民的反対派の革命運動は挫折した。農民は他との同盟なしには、他の革命的階級の指導なしには、封建的束縛を自ら絶ちきる事は出来ない。そして当時資本主義の黎明期においてそのような階級はのぞむべくもないのである。都市貴族ははじめから反革命の立場に立つていた、市民的反対派は反革命的動搖をつづけていた、平民的反対派はこれを指導するどころか逆に農民のあとからついて行つたにすぎない。當時は都市が農村をではなく、農村が都市を立ち上からしめたのである。このような状態にあつて農民の非組織的な力だけで封建支配体制を革命することは不可能である。農民戦争したがつてそれは「農民解放史上、世界史的に不可避な悲劇的序幕」^(一五) であつたのである。

論 說

とばいへ、この農民的農業革命を指向しその意味でブルジョア民主主義革命の先驅的意義をもつ反封建革命運動によつて、従來の封建支配体制は根幹よりゆすぶりうごかされた。反革命といふ基本線においては一致していた王、宗

侶の大封建領主階級、および下級騎士層も相互の間には激しい対立を藏していたのであつて、従来もそうであつたが、今後はそれが一層鋭くしかも新らしい意義と様相をおびて登場するに至るのである。従来の單なる王權と大諸侯の争は、これ以後、あくまで今までの支配体制を維持しようとする大領主の封建保守派とこれに対して新らしい支配体制を確立して封建政治の危機を回避しようとする封建改良派——絶対主義化せんとする封建勢力乃至王權、およびこれを支持する下級騎士層——の争に發展してゆく。そしてこの封建權力者間の内訌において、封建改良派は保守派への対抗上これを打倒するために人民大衆の革命的エネルギーを利用するのである。當時人民の力は未だあまりにも微弱であつて、その下からの運動が直線的に上部に反映するのではなく、そのエネルギーは必らず上の勢力に一度吸収され、屈曲されて作用せざるをえないのである。もちろん封建改良派と雖も、人民の革命的エネルギーが本質的に反封建性を内包している以上絶対にこれを許容することは出来ない。むしろここで強調さるべきは、彼らは本質的には人民の反封建革命運動を抑へつけるために従来の支配体制を廢して全國的規模での封建制の再編成を行ふといふことである。ただ人民の革命的エネルギーが、絶対主義化せんとしている封建勢力とくに王權がその打倒を望んでいる封建保守勢力にむけられた範囲内においては、彼らはそのエネルギーを利用するのである。

そしてまた、他方人民の側でも當時は未だ王權に頼つていた。例えば、かの「ワット・タイラーの亂」の時人民はなんといつたか。"With King Richard and the true commons" 王リチャードと眞の人民" これが彼らの合言葉であつた。^(一六)これはただ一例にすぎない。エンゲルスは當時の王權と革命的要素との關係について次のように云つてゐる——

『このような全般的な混亂のただなかにあつて王權が進歩的な要素であつたことは、みやすい道理である。王權

は無秩序のなかの秩序をあらはし、また反逆的な諸侯國の細分にたいして形成途上の國民をあらはしていた。封建的な表皮のもとに形成されつつあつたいつさいの革命的要素は、もつぱら王権にたよつていたし、王権の方でも彼らに頼つていた。』(エンゲルス『封建制度の没落について』、邦譯、マル・エン選集、第十六卷下、三七〇頁)。「これらの分子(革命的分子、筆者註)は、その意志をつらぬくにはあまりに微力であつたが、全封建制度の頂点である王権のうち、強力な後楯をみつけた。』(同上、三六七頁)。

また事實それによつて確立された絶対王制は、かつての分権的封建制度にくらべればたしかに進歩的であつたのであつてその意義を輕視することは許されない。スターリンは次のように云つてゐる——

『世界中のどの國も、もし封建的分裂状態から、また公國の紊亂から解放されることができないならば、自國の獨立の保持も、重要な經濟的および文化的な發展も、期待することはできないであらう。單一の中央集権的國家に統一された國だけが、重要な文化的、經濟的發展の可能性を期待し、自國の獨立の維持の可能性を期待することができる。』(『ブラウダ』一九四七年九月七日)。(一七)

しかし、絶対主義権力の進歩性は勿論一応のものにすぎない。その本質は、あくまで下からの反封建革命運動に対して、封建的特権を維持することにあつたのである。

かかる絶対主義の反革命的封建権力としての本質は、ブルジョアのウクライドがさらに發展し、かつての微力であつた革命的人民勢力あるいはその周辺から國民的階級である革命的産業ブルジョア乃至國際的階級である革命的プロレタリアートが出現し、^(一八)これらを中心としてこれと指導同盟關係にある強力な人民の反封建革命運動が展開されるや、赤裸々に露呈されるに至る。ここに、かつて客觀條件の未成熟によつて失敗したブルジョア民主主義革命が、いま

やふたたびしかも新らしい内容によつて現実に日程に上される必然性が存するのである。いま古典的ブルジョア民主主義革命に關する遠山茂樹氏の適切な表現を借りれば、『革命的ブルジョアジーは、前期的資本家ではなく、直接生産者から上昇した自生的な産業資本家層でなければならぬ。封建的農奴から獨立自營農民が生長し、その獨立自營農民層を中核とする中産的生産者層（大塚久雄氏のいわゆる）から産業資本家と賃勞働者が打ち出される。そのような歴史過程の進行する場合にはじめて、中産的生産者層を媒介とし、ブルジョアジーと耕作農民と都市小市民との間に同盟がむすばれ、国民的規模の革命運動が成立し、その革命性を貫徹することが出来る。』のである。因みに、遠山氏は、これを、吾が幕末には未だ百姓一揆を指導する革命的ブルジョアジーは出現しておらず、あつたものは前期的資本家であつた、といふ論点の中で云はれているものである。（遠山茂樹『明治維新』、東大歴史学研究会編、「日本歴史學講座」所收、一六八頁）。

かくていまや吾々は明らかに理解するであらう。絶対主義の主要な機能は、一貫して反封建的ブルジョア民主主義革命運動の抑壓・鎮壓であつて、これを農民的・平民的反对派の反封建運動に限定するを得ないことを。

ブルジョア民主主義革命における革命の指導乃至ヘゲモニーの問題（ブルジョアジーかプロレタリアートか、またブルジョアジーの反革命性の問題）、或はブルジョアジーが指導力となつた場合のブルジョアジーと小ブルジョアジー、都市平民¹前期的プロレタリアート、および農民との間における革命の推進力に關する問題は、當該諸國における具体的な資本主義の發展、發展の型（アメリカ型か、ロシア型か）、および國際的な世界史の發展段階に規定されるものであつて、^(一九)かかる要素を度外視してブルジョア民主主義革命を具体的に把握する事は出来ないのは云ふまでもないが、これは絶対主義一般の主要な機能とは一応別問題である。

(一) エンゲルス『住宅問題』、邦譯、大内兵衛譯、岩波版、九四—九五頁參照。

(二) マルクス『道德的批判と批判的道德』、邦譯、マル・エン選集 第二卷上、六八頁參照。

(三) このフランスに関する部分は主に、本田喜代治『フランス革命史』と高橋幸八郎教授の諸勞作によつた。例えば、『近代社会成立史論』第五篇市民革命の構造展望試論、『市民革命の構造』第二篇 基動 資本制生産Ⅱ「マニユファクチュア」の展開、『近代資本主義の成立』第七章フランス特權マニユファクチュアの構成、『フランス革命』(社会科学講座第Ⅳ卷「近代社会の成立」所收)、因みに、わが國における絶対主義研究の開拓者、服部之聰氏は、高橋、大塚氏等の業績について、次のように云はれている——

『われわれが津田博士の諸業績に參入せずして日本古代史を論ずる事が出来ないといふ場合とはくらべものにならないほどの緊密さに於て近代史研究のために大塚氏、高橋氏等の論者が占める意義は大きい。』(服部之聰『絶対主義の社会的基礎』民主評論第三卷第六号)。「今日敗戦後の現實の上に立ちまして、この戦争中に書かれた研究を経過しないでは、一言も絶対主義について正しく話すことはならぬと考えるのであります。』(同氏『絶対主義と農民問題』東洋文化講座Ⅱ「尊攘思想と絶対主義」所載)。

しかし、これはもちろん社会經濟史的分野に視角を限つた場合である。氏等特に高橋氏の方法が「經濟史的分析だけで、そこから一舉に絶対主義そのものの本質を規定」せんとすることについては、私も稻子氏と共に賛成し得ないものをもつ。(『法政論集』一〇〇—一〇一頁參照)。

論 說

(四) 前期的資本Ⅱ商業資本(Handelskapital od. Kaufmannskapital)、および高利貸資本(Wucherkapital)についての簡潔な經濟学的説明は、信夫清三郎『マニユファクチュア論』に與えられている。またその經濟史的考察は、大塚久雄『近代資本主義の系譜』上卷その他においてなされている。

(五) 絶対主義は中世議會の否定の上に成立する。これは歴史的事実である。ところで、中世議會の本質についてはあまり明らかになされていないようである。イングランドに於ては、英國々會が始めて召集されたのが、一二一三年ジョン王の時である。それ以後一二九五年エドワード一世の「模範國會」(Model Parliament)に於て形式上完成され、これが一四世紀エドワード三世の一三七七年の「善良國會」(Good Parliament)に於ては完全に完成された形をとつてゆくのである。こうしてイギリス中世議會は一三世紀末より一四世紀、一五世紀にかけて發展し、テューダー王朝の成立と共に一應その機能を喪失してゆく。ここで結論だけを云へば、中世議會は封建的生産様式の基盤たる封建的土地所有制＝マナー制度の最盛期ではなく、その崩壊期、いわゆるコンミュティション(＝金納化)の過程に成立しており、これに照應する分權的封建制度崩壊過程の上部構造的反映である。が、その性格は決して近代的であるどころか、むしろ封建的である。そこにおけるイニシヤはあくまで國王及び上院に代表される大貴族(Baron)にあつて、下院に代表される州騎士及び都市貴族といへども、政治的には國王と大諸侯の争に利用されたにすぎない。かかる中世議會の本質は、後のランカスター王朝の時に赤裸々に露呈される。それは絶対主義に対抗する反動的な宗俗の大封建領主のより所となるのである。かくて絶対主義化せんとする王權は、之を打倒しなければならぬ必然性をもつ。この點については稻子氏の紹介論文も、次のように云つてゐる――

『商業と産業の成長は君主の新しい収入源を生み出して、結局はそれの身分代表權關に依存しない状態を強化することになり、そして強力な、かれにのみ從屬する官僚的統治機構と常備軍の創設を容易にした。急激に租税は増大した。身分代表機關(セイム、パルラメント、シユタート)への自分の依存状態を解消して、君主はそれを召集したりそれを考慮することを止めた。』(『法政論集』一〇五頁)。

しかし、その云ふ所は、君主は革命的人民よりブルジョアジーを切りはなすといふ根本目的から、ブルジョアジーを経済的に保護したが、それは「結局」結果において、君主をして身分代表機關に依存せしめない状態をつくり出したといふのであつ

て、そのような結果が始めから目的であつたわけではない。私ははじめからそれが目的であつたといふのである。

(六) ドイツについては、エンゲルス『ドイツ農民戦争』、邦譯、大内力譯、岩波版參照、イギリスについては、C. Oman, *The Great Rebellion of 1381, The Political History of England* (Longmans Green & Co. 1929) vol. IV 參照。

(七) たとへば、イングランド十五世紀中葉の人民の革命的エネルギーを利用した下級騎士の反政府運動、いわゆるジャック・ケイドの亂の時にも彼らは積極的動きを示さず、それにつづくランカスター王朝とヨーク家の争の時にもあいまいな態度に終止した。これについては E. Power and M. M. Postan, *Studies in English Trade in the Fifteenth Century*, VII,

"The Financial Transactions between the Lancastrian Government and the Merchants of the Staple from 1449 to 1461" 參照。

(八) F. C. Dietz, *A Political and Social History of England*, pp. 100—110

(九) イングランドにおける具体的事実については、アンドン・モーロワ『英國史』上巻、水野・小林共譯、第三篇第六章「イギリス最初の資本家たち」參照。

(一〇) F. C. Dietz, *op. cit.*, p. 100

(一一) 羽仁五郎『經濟史學における市民的立場』(羽仁五郎選集、第一卷所收)これは主として、大塚、高橋氏らの社會經濟史學に対する氏の批判として書かれたものである。(同選集、二七〇頁)。すなわち、ややもすれば、政治權力、階級關係を捨象して何か經濟史的な範疇が歴史を作つてゆくが如き印象を與える社會經濟史的把握に対して、羽仁氏の所謂、歴史を具体的に動かしてゆく「人民」の立場から歴史をみてゆこうとするものである。氏のかかる立場は基本的には正しいのであるが、共に被支配者であるといふところから、封建權力者に対する商人⇄都市人と農民との本質的同盟性を導き出すのは、史實的にも理論的にも大変な飛躍があると思ふ。歴史はそれほど簡單ではない。エンゲルスは封建制の崩壊期におけるドイツの都市人に

論 說

三つの鋭い分派を指摘している。(エンゲルス『ドイツ農民戦争』邦譯前掲書、五〇頁)。これはドイツのみならずいづれの國にも妥当するものである。

(一二) 服部之聰『歴史的範疇としての農民革命』(同氏『明治の革命』所收、同九—一〇頁)。

(一三) F. Engels, *Der deutsche Bauernkrieg*, herausgegeben von Hermann Dunker, 1925, S. 37 参照。

(一四) C. Oman, *op. cit.*, 参照。

(一五) 服部之聰、前掲、『歴史的範疇としての農民革命』『明治の革命』五頁)。

(一六) C. Oman, *op. cit.*, p. 45

(一七) 『史的唯物論』上巻、コンスタンチノフ監修、ソヴェト研究者協会譯 三八二頁より引用。

(一八) 近代産業資本および近代賃銀労働者がいかにして発生するか、その具体的系譜については、大塚久雄「近代資本主義発達史における商業の地位」および、補説一、中産的生産者層とその分解、補説二、近代化過程に於ける二つの途。(同氏『近代資本主義の系譜』上所收) 参照。

(一九) 云ふまでもなく、資本主義の帝國主義段階以前のイギリス、フランスあるいはドイツの革命と帝國主義段階におけるロシアの革命、また獨占段階以前にあつても、資本主義発展の西歐型Ⅱアメリカ型を示したイギリス、フランスの革命と東歐型Ⅱプロシヤ型(それ故後進的)をしめしたドイツの未完成の革命の具体的差異。この點、本稿においてはとりあげることが出来なかつたが、稻子氏の紹介論文は、これについて殆んどふれてないように思はれる。(『法政論集』一〇六頁参照)。もつとも、それはその論文の論理に従へば当然であらうが。

三 均 衡 論

すでにこれまで述べてきたところからもはや吾々は、「均衡」の意味を、稻子氏の紹介論文が述べていたような『それはもしブルジョアジーが人民大衆の反封建運動の先頭に立つたならば、かれらは政治的に支配している領主の階級に劣らない力を代表しただらうという意味』（『法政論集』一〇四頁、本論文一一五頁）と解することはできないことは明らかであらう。當時のブルジョアジーは反封建革命の先頭に立ちうる力などではないからである。

周知のようにカウツキーは、階級均衡について次のように云っている――

『絶対王制はブルジョアジーを損ふ事なしには貴族を満足させる事は出来なかつたし又その逆であつた。兩階級の斗争は絶対王制のもとでも決して完全には休まなかつた。しかし兩階級の均衡がつづいた限りは、すなわちブルジョアジーが国家権力・王制を自分達に奉仕させようと思いつかなかつた間は、これら社会の上層階級の斗争は主としてさまざまな党派が君主の偏愛を得ようとする阿諛追従のかたちをとつた。』（カウツキー『フランスにおける階級対立』）。

見らるる通りここにおいては、前期的ブルジョアジーと近代的産業ブルジョアジーとが範疇的に同一視され、あるいは均衡に利用されたブルジョアジーは近代的産業資本家とされている。しかもここから歸結するものは、絶対主義の超階級国家論乃至折衷国家論（半分貴族的な半分ブルジョアの国家）である。ところで若し前期的ブルジョアジーと近代産業ブルジョアジーを範疇的に區別せず、しかも階級國家理論を堅持しようとするならば、稻子氏の紹介論文の如き均衡論とならざるを得ないであらう。しかしさきに述べたように、吾々はこれに賛同することは出来ないのである。それでは、吾々は「均衡」の意味を具体的に如何に把握すべきか？ これについては、私は未だ定見といふべきも

説論

のを有たない。ただここにおいては、本稿においてもさきに述べた前期的商人（特権上層ブルジョアジー）の封建権力者に対する債権者としての地位、或は大塚教授が『商業資本と封建的支配者との対抗は封建的剰余生産物の分取りの仕方における抗争、どちらが澤山とるかだけの内部的抗争で、一旦封建制の基礎が本當に震撼される場合には共同して維持の事に當るのです。』と述べているようなこと（大塚久雄『近代資本主義の特質』、歴史学研究会編『日本社會の史的究明』所収）が、さらに具体的に追究さるべきではないかといふことを指摘しておくに止める。

(一) 大阪市立大學編『經濟學辭典』の「絶対主義」（松島栄一氏担当）の項より引用、同六一六頁。

(二) 堀江英一『方法の問題』——絶対主義について——（歴史学研究、第一四八号、四一—四二頁）参照。なほ堀江教授は、その後「従来の均衡理論を批判しつつ絶対主義の階級的基礎を積極的に規定」すべく『絶対主義論の悲劇』と題する論考を發表されている。（京都大學『經濟論叢』第六十七卷第二・三號）。

むすび

以上本稿において私は、稻子氏の紹介論文「ソヴェトの絶対主義論」について、若干の疑問を提出するとともに併せて私の見解を述べた。ソヴェトの絶対主義論が、これに就いて如何に考へられるか稻子氏を通してでも教へていただければ、私にとつて非常に幸甚とするところである。

他方、私はこの論文に教えられるところが多かつた。本稿において私は大きな誤りを犯しているかもしれない。それは大方の批判と御教示によつて是正するに吝でないつもりである。ただ、私はこの論文と対決することによつて、絶対主義の政治史的把握が非常に明確にされたことは、私自身の今後の研究にとつてきはめて大きな意味をもつものと考へる。行論中失礼な表現があつたならばそれをお詫びすると共に併せて紹介者稻子氏に感謝する次第である。

以上